

『スピリチュアルブームと宗教』

いま伝統仏教のなすべきことは？

立正安国・お題目結縁運動は何をすべきか？

楠山 泰道

■時代・社会の分析の必要性

世代別価値観の変化

物質的経済的幸福観～精神的価値観へ

家族制度崩壊～個の時代へ

宗教への拒否反応（オウム事件、カルト問題）

三離れ — 寺離れ・墓離れ・葬儀離れ

団塊の世代「自宅の近くに」墓地の引越し 660 件（平成 18 年神奈川）

■宗教に取って代わるスピリチュアルブーム

○新たな霊のブーム

- ・すぴこん
- ・宗教法人ではなく営利企業＝会社
- ・御守り・御札に代わる“会社”が販売する宗教グッズ
- ・みんなが霊能者
- ・セラピー文化の台頭

○心理主義

- ・被害者化
- ・饒舌に語り出した被害者たち
- ・被害者がクライアントになり、ヒーラーになる

○宗教離れと、すぴこんブーム？

- ・宗教に代わるスピリチュアルブーム
- ・精神的拠り所、魂の自己探求へ
- ・個の時代の不安と自己発見
- ・目に見えないもの（霊性）への価値
- ・物質的価値観から精神的価値観へ
- ・自己完成ではなく自己実現（自己完結）へ
- ・生きがいや存在理由が見つからない

○商業化するスピリチュアリティ

- ・すぴこんに見る実例

■セラピー文化の台頭

○新たな文化の形成 — セラピー文化

- ・セラピーとは

○心理主義化する社会

- ・心理学的知が倫理観、世界観に。宗教機能代替を担う

○被害者化とは

- ・虐待と抑圧の犠牲者としての自覚。
- ・病理的解釈する文化的傾向が因果応報を捨てる

○因果応報のない新たな解釈

- ・医療専門家によって矯正されるべき自己のイメージ
- ・受けた被害の補償を勝ち取るという被害者化像

- 配下にされる仏教教団と聖職者
 - ・教団と聖職者が、セラピーとスピリチュアル下に配置

■スピリチュアルブームとは何か

- セラピー文化とは脱宗教・聖職者運動
- 宗教教義は俗化心理学に
- 聖職者はスピリチュアルカウンセラーに取って代わられる
- エンロール
 - ・かつてのクライアントがカウンセラーに無限連鎖
 - ・教団と聖職者不要、被害者だけのスピリチュアルブーム

■カルト問題も、すぴこんも

- 没頭する人々の心理は
 - ・精神的苦痛から解放されたい
 - ・自分らしさを求めたい
 - ・存在感、居場所がほしい
 - ・靈的苦痛から解放されたい
 - ・超能力により救われたい
 - ・幸福になりたい
- 問題を浮き彫りにすれば
 - ・本来の宗教の役割が喪失
 - ・宗教離れがもたらす悲劇
 - ・宗教者の無関心が、宗教を滅ぼす

■では、宗門運動はどうあるべきか

- 祖願に学ぶ原典に立つ
 - ・基本方針を考える
- 基本理念の解題
 - ・「立正安国・お題目結縁運動」16年を貫通するテーマ
 - ①個の成仏とともに、社会全体の成仏を目指す
 - ②われわれは法華経とお題目を携えて、世界に赴き、現実と向き合う
 - ③世界の諸宗教との対話を通して、相互理解を深め、共働して、いのち・平和・環境問題の解決を目指す
- 今回の宗門運動は、どうあるべきか
 - ①戦争責任問題ならびに反省態度の表明、世界立正平和運動、核廃絶と恒久平和の確立
 - ②経済復興から高度成長期、人口流動、都市化の中の日蓮宗の自己主張 — 護法運動
 - *創価学会などの戦後法華系新興宗教運動の拡大に対抗
 - *報恩 — 豊かな社会における人の生き方への提言
 - 日蓮聖人の思想と行動に関する再考
 - ③ポスト産業主義時代、モノから心へ「こころの時代」における日蓮宗の布教 — お題目総弘通運動
 - *誓願 — 我々は本化菩薩として、社会に対して何ができるのか？
- 本宗の教理、教学の確立と修法道の確立
 - 教相と蓮密の関係・・・下種結縁、衆生救済の布教

立正安国とは何か

私は、立正福祉社会家庭児童相談室本部相談室「青少年こころの相談室」において様々な家庭問題に関わっています。特に、子どもたちの引き起こす諸問題、非行・家庭内暴力・不登校・ひきこもりやカルト入信問題などに対応しています。

これらの相談に向かい合い時に、しばしば信じられない気持ちにさせられることに会います。それは、子どもではなくその親たちが宗教に無関心であったり、仏教の基本的な教えに関する知識があまりないということです。むしろ、宗教に対して無関心であることが正しいと信じているように見えることです。

総じて、かつてならば誰もが持っていたところの他人への思いやりや自分に対する慎みというものが欠如している大人が増殖しているのではないかと思います。現在、社会で問題になっている建築や食品の擬装問題と同じように、人にばれなければ何をしてもよいという利己的な考え方が蔓延して、歯止めが効かなくなっているという疑いをもちます。

社会が共有すべき倫理を失う時に社会不安を招きます。権利欲求ばかりが強く、ともに協働して生きるという意志を失った社会は、やがて相互不信に陥ってその存続に関して危機を迎えます。日蓮聖人が直面した末法の世とはこうした社会状況そのものではなかったかと思えます。私たち日蓮宗が宗是とする「立正安国」の行動とは、現実の社会とそこに暮らす人々に対して、存続可能な社会のための公共倫理の確立を呼びかけるものではないかと思うところです。

スピリチュアリズム

さて、宗教の果たすべき存在証明とは何でしょうか。その一つは人間の過剰な欲望を自己抑制に導くものであり、また、他者の痛みを感じる心を個々の人間の内面に植え付けるものだと考えます。今、宗教が本来果たすべき役割において不十分であることは確実であり、宗教の不在が続いています。このような「宗教離れ」の傾向は社会全体に拡散しているように感じられます。しかし、このように社会全体に「宗教離れ」が進んでいるのに対して、全く正反対の現象が現われています。

今日のマスコミが提供する「占い」、「心霊」、「霊能」などがそれです。これらは「代替宗教」というべきもので、ストレス社会に生きる多くのマスコミ大衆に対して「癒し」を与えているとされています。これを「スピリチュアル・ブーム」と呼ぶのだそうです。各テレビ局が競ってこれらのスピリチュアル番組を放送し、高視聴率を獲得しているのだそうです。書店の精神世界のコーナーにはこれらのスピリチュアル・ブームのスターたちの書いた本が横積みになされていることから、よく売れているようです。

宗教嫌いの反面、エンターテイメントに過ぎない軽佻浮薄な「非宗教」に「癒し」を求める“いい大人”が増殖しているのです。

伝統仏教の無策

人間の根元的な「苦」がなくなることはありません。むしろ、「苦」は深まっていると言えます。経済のグローバリズムの進展によって日々の競争はより激化し、経済的格差が拡大する一方です。その結果、人々の不安や不満、そしてストレスが以前に増して蓄積されています。したがって、本来の宗教が説得力を持たないのに反比例して、非宗教が進出して影響力を強めていると考えられます。

振り返れば、少なくともここ数十年あまりの期間、伝統仏教は何もしなくてもそれなりにやって来られました。戦後復興から引き続く右肩上がりの経済発展によって、人々はそれなりの幸福感を感じ、あえて宗教に向き合わなくても人は満足して来たからです。

伝統仏教は、通過儀礼としての葬儀・法事という社会的分業の分野を担うものとしてそれなりの社会的需要を満たして来ました。いわゆる「葬式仏教」として存続して来たということです。つまり、布教伝道に関してそれほど力を入れなくてもよかったということです。しかし、伝統仏教の“良かった時代”はすでに終わりを迎えつつあるのではないのでしょうか。

言うまでもなく、日蓮宗は上行所伝の南無妙法蓮華經を人々に唱導する伝道宗門です。教師は檀信徒に対しては法華信仰のさらなる深化を促し、これまで信仰に無縁の人々に向かっては法華經と日蓮聖人の教えのすばらしさを説いて導き入れるという不断の伝道布教を組織として行うというところに日蓮宗の存在理由があることは自明です。しかし、果たして、私たちはその日蓮聖人の「誓願」に真摯に向かい合っ来て来たと言えのでしょうか。その問いに答えることから逃げてはならない時代にたちいたっていると考えられるものです。

カルト問題が暗示するもの

一九九五年のオウム真理教による地下鉄サリン事件によって、「宗教はコワイものだ」「キケンなものだ」「近づくべきではない」というような“宗教忌避”のメンタリティが国民に広く行き渡りました。また、9.11 同時多発テロ以降、イスラムの原理主義組織によるとされる市民を巻き込んだ自縛テロの多発という事態も、「宗教離れ」を亢進している原因だという指摘も間違いではありません。

私は人間が根底から「宗教離れ」を起こしているとは考えていません。合理的思考では解決ができない人間存在の不条理～生老病死や人間関係にまつわる苦悩～などを感じて、それら「苦」から解放されたいと願う人々が途切れることはないというのは釈尊の説いた絶対の真理です。

この日本において、これまでに歴史的に経験したことがない不可解で深刻な事態が起っています。豊かさの中で自殺者が常に年間3万人以上存在し、中高生が相当の割合で適応障害から精神的な病気に罹っているとされています。「うつ病社会」というも言われて久しい状況にあります。実は、不登校や引きこもり、さらにはカルト入信という問題の背景にはこの「うつ病」が蔓延する社会状況があると考えています。

カルト問題の本質は、カルトの“宗教”を作って人を支配したいと暗い情念を持つ教祖のパーソナリティの問題であるよりは、その“宗教”によって“癒されたい”と思う大量の人々がこの社会にいるというところにあります。つまり、カルト問題は「うつ病社会」それ自体の一つの現われであるということです。スピリチュアル・ブームも、何かによってこの“癒されたい”という集合的欲求が創りだしたものであり、本来ならば既成の宗教には向かずはすなわち、本来の宗教に回収されることなく、手頃な非宗教に向かっていていると考えるべきなのではないかと思えます。私たちが「伝道宗門」として「苦」を有する人々に門戸を開いている教団であると自認するならば、大衆の宗教に関するこのような「ねじれ」をただして、受け入れることに向かうことこそ最初に手がけるべきことではないでしょうか。

ところで、私たち宗門の布教伝道のアクセスが寸断されつつあることが最大の問題です。私たちの布教戦略に重大な欠陥があるからこそ、彼らが私たちの方に向かって来ないのではないかと考えるべきなのではないでしょうか。いくら、宗門運動として「立正安国・お題目結縁運動」を掲げても、そこに効果的な戦略が付随しない限り、文字通りの「お題目」に終わることは容易に予測されることです。

次世代を担う若手教師の育成と熱き思いに期待・・・人材育成の急務・・・NSN 青少年教化活動の推進